僕たちが羊を数えることはもうないかもしれない

ケセランパセラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕たちが羊を数えることはもうないかもしれない

【Ｎコード】
Ｎ３２３２ＢＡ

【作者名】
ケセランパセラン

【あらすじ】
主人公〈飯島健吾〉“いいじま　けんご”は今年から高校生になる。新しい出会い新しい環境に期待を膨らませる健吾。
だけど彼はこのときまだ知らなかった。これから世界中があるウイルスによって崩壊していくということを…

始まり．１（前書き）

ひらめいたので書いてみました。
駄文．グダグダなところがあると思いますが暖かい目で見てくれると嬉しいです。

始まり．1

人間が生きていくうえで必要である行動
“睡眠”
僕こと〈飯島健吾〉”いいじま．けんご“はこの行動をしているときが一番幸せだ。
今もベッドの上で暖かい毛布に包まれながら爆睡中であった。
だらしなく足を投げ出し口の端からうっすらとヨダレが垂れいい夢でも見ているのかなぜか表情は幸せそうにほころんでいた。
しかし、そんな幸せもずっと続くわけではない。しばらくすると彼の部屋のドアが勢いよく開け放たれた。
「健吾ー！　あんたいつまで寝てんの！！　遅刻するわよ！」
とたんにけたたましい大声が部屋中に響く。
「うーん…あと5分…」
そう言って毛布を深くかぶろうとする。
「なに言ってんの！　あんた今日入学式でしょうが！」
そして、勢いよく毛布を剥ぎ取られる。
「うわっ！」
あまりの勢いのよさにベッドから落ちそうになる。
「もう、何するんだよ母さん！」
そこにいたのは僕の母さん〈飯島　美鶴〉“いいじま　みつる”だった。
「何するんだよじゃないわよ！　あんたがいつまでも起きてこないからわざわざ起こしにきてあげたんでしょうが！」
片手に掴んだ目覚まし時計を顔の前に突きつけて指をさされる。
そこに表示されていた時刻は８時１０分。遅刻寸前の時間だった。
「え！？俺目覚ましかけたのに何で？」
「んなことよりさっさと準備して行きなさいよ」僕は急いで着ていた寝間着を脱ぐと高校の制服に着替えた。机の上に置いておいた学

生鞄を乱暴に掴みそのまま部屋を出る。
「気おつけて行くのよー」
「わかってるー！」
今日から僕は高校になった。そして今日は入学式である。初日から遅刻なんてしたらカッコ悪い。「何でこういうときに寝坊するかな僕は～！」
自分のことを腹立たしく思いながらとにかく学校に間に合うことを祈っていた。

けれど僕はこの時まだ知らなかった。
寝坊できるということがどんなに幸せなことであるのかということを。

始まり．2

僕はなんとか入学式に間に合った。後少し遅れていたらおそらく間に合わなかっただろう。
急いで学校の中に入り昇降口に張り出されているクラス表を見る。
自分のクラスは3組だった。
教室の中に入るとまったく知らない顔ばかりでほとんどの生徒が緊張しているのかそわそわしていた。どうしよう…すごく緊張するんですけど。
とりあえず自分の席を探すため教室の中をキョロキョロする。
そのとき、僕はたまたま一人見たことのある顔を見つけた。
「あれ？智美じゃないか」
「え？健吾？」
そこにいたのは幼なじみの〈滝沢　　智美〉“たきざわ　ともみ”だった。
「お前もこのクラスだったのか」
「うん。っていうかやっぱりあんたと同じクラスなのねあたしは」
そう、僕と智美は幼稚園の頃からの仲なのだが今まで幼稚園はもちろん小学校、そして中学校とずっと同じクラスだったのだ。
「みたいだな。でも知ってる顔がいて安心したよ」
「まぁね。あたしもなんだか安心したわ。しかも今回に限っては席も隣同士みたいよ」
「え！？本当に？」
そう言われてみると確かに教室の中で空いている席は智美の隣りの席だけだった。
「ここまでくると裏で何か仕組まれてるんじゃないかと思うわよね」
「た、確かに…」
ここまでくるとそう思いたくもなるかもしれない。
まぁ、お互いの仲は悪いわけではないので問題はないわけだが。

そして、少ししてからチャイムが鳴り教室の中に教師が入ってきた。
「皆さんおはようございます。今日から皆さんの担任なります〈柴田　孝二〉“しばた　こうじ”といいます。これから一年間よろしくお願いします」見た目はまだ若い感じのする男性教諭だった。
たぶん、教師になってからまだそんなにたってないのではないのだろうか。
「じゃあ、早速皆さん体育館に移動してください」
そう言われてみんな一斉に体育館えとむかう。
そして、入学式が始まった。
校長先生の長い話や在校生によるイベントなどがある普通の入学式だった。何度か寝ちゃいそうになったけどなんとか耐えた。偉いぞ、俺。
そして入学式が終わり今日は後は帰るだけである。
「ねぇ、健吾」
「ん？どうした智美？」　「帰りにちょっと買い物付き合ってくれない」
「ああ、別にいいよ」

　というわけでデパートに買い物に来た。
「ところで何買うんだよ智美？」
「ん～…ひ・み・つ」
なんだそりゃ。秘密にしなきゃいけないようなものを買うのか？
とりあえず智美について歩く。その途中、電気店の前に並ぶテレビのニュースでこんなことを言っていた。
“今、世界中でなぜか自殺する人間が増えてきている”
なんとも物騒なニュースであった。世界規模で自殺者が増えているなんてよくないなぁ～
このときの僕はそれくらいにしか考えていなかった…

始まり．３（前書き）

ホラーって書くの難しい（―”　―；）どうしましょう…

始まり．3

「ただいま～」
しばらく智美と一緒に買い物をした後、僕は家に帰ってきた。結局智美が何を買おうとしていたのかは最後まで教えてくれなかった。
「あれ？母さーん？」
なんだか家の中が静かだった。母さんどこかに出掛けたのか？
そう思ったが玄関には母さんの靴があった。
ということは…
「母さん寝てるな」
僕は確信していた。
なぜなら僕の家族は寝るのが大好きだからである。暇さえあればすぐに寝る。どこでも寝れる。そんなグータラな家族なのである。
自分でいうとなんだか情けなくなってくるな…
居間に入ると案の定母さんはソファーの上で寝ていた。
「やっぱり。母さんこんなところで寝てると風邪ひくよ。ちゃんと布団で寝なって」
ゆさゆさと体を揺さぶる。しかしまったく起きる気配がない。
参ったな…どうしよう。……まぁ、いいかこのままで。
そのうち起きてくるだろ。
とりあえず放っておくことにした。
自分の部屋に戻りすぐさま制服から私服に着替える。
「やっぱりこの格好が落ち着くよな」
そのままベッドにダイブする。母さんが日干してくれたのかベッドシーツと毛布がポカポカしていた。
そのまま枕に顔を埋め目を閉じると僕の意識はほんの数１０分で闇に落ちていった。

しばらくして僕はゆっくりと目を覚ました。

いつの間にか部屋の中は真っ暗になっていた。
「ふぁあ～…気持ちよかった」
まだ頭がボーっとする。とりあえず部屋の電気をつけて時計を見ると時刻は１９時だった。
「あ～…お腹すいたなぁ～」
そう思っていたとき
「健吾ーご飯できたわよー」
ちょうどいいタイミングでご飯ができたようだった。
ボーっとする頭を起こし居間に行くとテーブルの上に美味しそうな和食料理が並んでいた。
「お、健吾起きたか」
そして、テーブルにはすでに一人座っていた。
「父さんおかえり」
そこにいたのは父〈飯島　竹富〉“いいじま　たけと”だった。
仕事は一応サラリーマンで営業担当らしい。大変な仕事なのだろう髪は所々白髪が混ざり顔つきも少し疲れている感じがした
「さぁ、じゃあ食べましょう」
母さんもテーブルにつき家族全員で夕食を食べる。
「ねぇ、健吾。学校はどうだったの？」
「どうって…普通だよ。あ、そういやまた智美とクラス一緒だったよ」
「あらよかったじゃない！」
なぜか母さんは嬉しそうだった。
「本当にずっと一緒だな。健吾と智美ちゃんは」父さんもニヤニヤしながら肘でツンツンしてきた。
「まぁ、知ってる顔がいるのはありがたいけどさ。っていうか何で二人とも嬉しそうなんだよ」
「嬉しそうになんかしてないわよー」
母さんはからかうような口調で言った。

今日の夕食はその話題で持ちっきりだった。

その後、今日は少し疲れたのでサッと風呂に入り少し早めに寝ることにした。
現在時刻２２時３０分。
風呂から上がり居間に行くとまだ父さんが起きていた。
いつもなら仕事で朝早くに家を出るのでもう寝ているはずなのだが。
「父さんまだ寝ないの？」
「ん？あぁ、なんだか全然眠くなくてな。もう少し起きてるよ」
「そう。んじゃおやすみ～」
「あぁ、おやすみ」
まぁそういうこともたまにはあるだろう。そう思い僕はあまり心配しなかった。

しかし、この時すでに異変は始まっていたのだ。僕が気がつかないうちにゆっくりとしかし着実に…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3232ba/

僕たちが羊を数えることはもうないかもしれない

2012年1月10日16時02分発行